

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成20年8月1日発行「毎月一回」日発行
俳句雑誌 沖 第39巻第8号



俳句雑誌[おき]

8
月号

沖
発行所

前例

能村 研三

合掌句碑十五年

村 沈め石積ダムはケルンめく

梅 雨川を縫うて詣でし先師句碑

黒 南風や句碑の石工の今は亡し

句 碑守は朴と楨さみだるる

飛騨白川郷に平成五年七月に開眼された先師登四郎の合掌句碑はことし十五年目を迎えた。これを記念して高山支部の長尾きよかさん、小林もりゑさん、そして新支部長の古守弓子さん、金井双峰さんらが中心になって中部大会が開催された。これに参加した地元高山、愛知支部の方、また東京からも先師を知らない世代の人たちを含め多数参加してくれた。

高山からバス二台で白川郷へ向かったが、ここに来る度に高速道路が整備され交通の便が良くなっていることに驚かされた。七月に入ると東海と北陸を結ぶ自動車道で未開通部分の白川トンネルが開通すると、名古屋からも高速道路だけで行けるようになる。高山からも以前よりかなり早く行けるようになるという。ただこの日はまだ開通していなかった。ただこの日はまだ開通してこなかった。下の一一般道を使うことになり、むしろこの方が良かった。と言うのも高速道路だと殆どトンネルだけで、周りの風景が見られないが、一般道では庄川桜や村全体が沈んでしまった御母衣湖、ブルーノウトが絶賛したという合掌造りの遠山家など、五十年前に先師がここを訪れて俳句を詠んだ所を見ることが出来たのである。俳句の旅がいかに

楫の実父のつぶやきかも知れぬ

合掌の藁屋根弾く梅雨しづく

青梅雨やダム湖の岸の抉り痕

秘境失ふ万緑は密なれど

送り梅雨婆娑羅崩しのダム湖岸

洞門のあばら透かしに梅雨はげし

機能的かつ合理的な旅とはそぐわないものかを立証してくれた。

当日は梅雨の最中でしかも山間部なので、時折雨が強く降る場面もあったが、久しぶりに皆と合掌句碑を見る事が出来た。大きな句碑は合掌屋根をイメージしていて、冬になるとそれ自体がすっぽり雪で隠れてしまうそう。『能村登四郎句碑』と書かれた標柱が風雪に耐えているためか掠れているのも印象的であった。しかし、建立以来の歳月にそこここが苔むして周りの風景にすっかりとけ込んでいた。

能村 研三



道一筋

林 翔

震災の記憶

中国四川省の大地震で多数の死傷者が出たことはまことに痛ましい。しかし日本も地震国、いつ大地震が来るかもわからないと思っていた矢先、岩手宮城内陸大地震である。死傷者数は中国より遥かに少ないとはいえ、毎日その惨状がテレビで放映されるから胸に迫ってくる。

高きより降り来る蟻よ道一筋
トンネル出し眩しさも嗚呼梅雨の空
目に見えぬ湯気打水を昇るらし
十葉よ汝は雨待つか吾は待たず

私が大地震を経験したのは大正12年（1923）の関東大震災であった。私は小学校四年生。九月一日は二期期始業式の日。式を終えて家に帰り、やがて昼食。茶碗と箸を持った途端、家は大揺れに揺れ、棚の上の物はすべて落ちて来た。それを踏み分けて外へ逃げようとすると、臨時に取り込んであった張り板が反対側の壁に食い込み、それでも動かない。その下の三角形の隙間を潜って某邸跡の広場に避難した。やがて姉が帰り、父が帰り、当時池袋に在った成蹊学園に通っていた兄を心配し

人遁^のがし 電を躍らす 石だたみ

神輿 昇く 茶髪 金髪 さら 真青

面影の母は 束髪 白日 傘

老の身を 易々と 抜け 風涼し

黒南風や 電話 短く 友病めり

ホー ス置き 如雨露にて 撒く 水いと し

ていたが、兄も池袋から本郷まで歩いて無事に帰って来た。

私の住んでいた駒込林町（現、千駄木三丁目）は、団子坂を上って右に入った所。坂上は地盤がよかったと見えて、大揺れには揺れても倒壊した家は無かった。しかし坂下の家はすべて倒壊したと聞き、九歳の私は様子を見に、団子坂上の角まで行ってみた。坂を昇って避難して行く人々の顔・顔・顔、すべてまっさおだった。あの蒼顔は今も眼裏に残っている。

（註）関東大震災は午前11時58分、各家庭で焔炬を使っており、風も強かったので死者十三万人余と言われる。



林 翔

蒼茫集



草 笛 辻 美奈子

天上へ死者差し上ぐる桐の花
死に近きたましひ淋しがる夏野
死ぬるため眠るからだや椎の花
明け易く死へとたましひのみ目覚む
ほうたるに息をあはせて身罷りぬ
草笛や逝く父に言ふありがたう

麦の秋 小山田子鬼

竿売りや植田の水をひびかせて
しづけさが拡がりとなる植田かな
村中の朝が息づくさくらんぼ
起されしいのちありけり麦の秋
山鳩の鳴く日鳴かぬ日朴咲ける
死のときのひとりにさせる青葉木菟

熟考 洲上千津

老鶯の熟考鳴きの問合とも
わが身御す手綱かげんや青南風
すつくと立つ脚力きたへ梅雨晴間
腹ふくるる業を諾ひ椎の花
療院まで日傘を杖にしてしまふ
日日草日程密に使ひきる

視界 辻直美

美しき五月を残し夫逝けり
死ぬ人の視界に入る夏の月
海老蔵似の僧の一喝青あらし
初ほたる骨壺白くまもりけり
植田いま神のあそべる雨脚に
梅雨傘を畳むわが家に喪の匂

水くらげ 北川英子

木洩れ日の囁き合うて新樹林
己が影探しに沈む水くらげ
鞭打つて天馬とせむか青嵐
足下より雲海に消ゆ落石音
祝大畑善昭氏瑞寶寿光章
みちのくの男時あをあを明易し
ほのぼのと梅雨も人の輪賢治の地

落し文 坂本俊子

これよりはずうつと一人落し文
北山の杉美しき男梅雨
涼しかり口一文字十五歳
雲の峰背広ネクタイ往診に
円かなる明日を願ひて草を茹る
水底まで青葉の淡海に泊まりけり

主役 久染康子

ほたる袋濃淡咲いて師の忌日
竹酔日雨しつかりと降りにけり

逃亡者めく裏滝を見るコース
涼み船屋は呆けてゐたりけり
髭を二度剃り父の日の主役たる
しやつちよこばつてゐる捕虫網のおろしたて

雲の峰 松井のぶ

星出千重撰行土

宇宙の美・儂さをいふ雲の峰
桐の花孤高の位置へみんな逝く
万葉のますらをぶりや青筑波
住み馴れて青葉木菟まで子守歌
余後の身はパズル数独梅雨さなか
六月はまたも齢を賜ふ月

まばら咲き 千田百里

充電の年かも朴のまばら咲き
万緑に埋れて魚の眼になつて
藤房に分け入り鬱か昂りか
十三日金曜晴れて桜桃忌
瓶に挿すパセリ厨の小さき森
眼裏のパリも刻みしパセリも青

潮鳴集



夢

篠藤千佳子

叶へたき夢風船の手を離す
異次元の扉あるやも夕ざくら
手のひらの上を向きたる花疲
遠き日へ道のつながる汐干狩
パンジーのときどき余所見して日暮

浮巢めく

服部早苗

あはうみの島影もまた浮巢めく
汗ふけば石田堤の松の反り
花あふひ飛鳥瓦窯の出土して
迷ひ出て夢殿の裏麦の秋
インク差す父の日の太万年筆

青薔薇

小嶋洋子

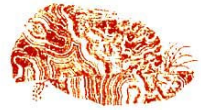
青薔薇月に生まれし花ならむ
地下街にあまた矢印走り梅雨
噴水のどの一瞬も精一杯
荒梅雨やもつとも濡れしトップ記事
黴の花東京メトロ増殖中

紙の足

工藤進

先師の墓参
芍薬の紅深め合ふ墓ふたつ
身丈超す楽器を背に甲虫
かちわりを鳴らしグラスに星を呼ぶ
靴下の紙の足抜き朝ぐもり
父の日の父性のごとき夕汽笛

沖作品



能村研三選

文化財となる料亭や風薫る

薔薇といふプライド薔薇といふオーラ

とりあへず並ぶ行列パリー祭

忙しきことは嬉しきほととぎす

廃校のもう近寄れぬプールかな

甚平着て保守派の父でありにけり

鍵穴の涼しき音を立てにけり

円盤のやうに浮かせて蚊遣香

雲の峰布教のごとくひろがり来

風に耐へるあめんぼの上腕筋

モンローの黒子例へばさくらんぼ

鳥巢立ち町に二人の宣教師

松の芯青き磁力を受信中

サハリンへ雲は流れて樺の花

六月や金平糖に角六つ

長崎

小林 奈穂

東京

齊藤 實

七種 年男

水音にはじまる水仕根白草

空青し皿をはみ出す初鯉

去る人の緑雨ぼかすと謂ひつべし

街籠ガラスに映る身のかげら

茅花流し海見るだけの車寄せ

一面の代田布石を待つごとし

蝌蚪泳ぐ水の惑星ささ濁り

樟若葉大樹のいぶき日に照らふ

働くや照るも曇るも青嵐

絵馬鳴らす茅花流しのゆくへかな

とんび笛配る一村植田澄む

新緑に吸ひ込まれゆく水の音

青嵐 鉄片なりに鳶一羽

人寄せて人には遠き水芭蕉

いつよりのかかる花眼や更衣

千葉

鶴見 遊太

茨城

岡澤 田鶴

北海道

梶川智恵子

沖作品 15句選評

*

能村研三

薔薇といふプライド薔薇といふオーラ

小林 奈穂

薔薇の花は情熱的で凛としていて、さらには優雅でリッチなイメージがある。女性にたとえれば、高貴でプライドがあり、花の香はオーラも発する。「プライド」「オーラ」という二つのカタカナ語を「薔薇」「薔薇」とリフレインを利かす表現の中で巧みに使っている。以前、私は一句の中にカタカナが二箇所出てくるのは俳句の表現としてうるさいので余り使わないようにと言ったことがあるが、この句の場合は自分の捉えた薔薇のイメージを印象深く表現したことで効果があった。

甚平着て保守派の父でありにけり

齊藤 實

甚平は薄地で作った袖無しの単衣。仕事着やふだん着にする。素肌に着ると涼しい。まだ仕事を持っている世代であれば甚平

を着るのは、仕事から帰って風呂上りや休日のくつろぎの時に限られる。しかしこの「保守派の父」はすでに仕事もリタイアして毎日が日曜日の人なので、夏になると殆どがこの甚平がユニホームとなっているのだろう。毎日の生活が規則正しく若いものに口うるさく細かいことにも厳しい頑固親父なのだろう。何か下町気質の父親像が、感じられる。

モンローの黒子例へばさくらんぼ

七種 年男

マリリン・モンローの、口元の黒子はセクシーなイメージを与えよく知られている。またカクテルの名に「ビューティスポット」というのがあり、これは『つけ黒子』という意味があり、カクテルグラスの底に沈む美しく赤いポイントを黒子にたとえたネーミングだそう。七種さんの句も大胆な句である。さくらんぼをここに据えたのが面白い。

去る人の緑雨ぼかしと謂ひつべし

鶴見 遊太

どんな別れの場面かはわからないが、中七にある「緑雨ぼかし」の造語がうまい。あたりの山々は満面に緑を湛え、その緑を癒すかのように静かに降る雨だが、何かやるせないような、アンニュイな気配を感じさせる雨でもあり、どこか明るく、どこか仄暗いのは去る人への思いでもある。(以下略)